



世に美味珍味の類あれども、これほどまでにシンプルかつ奇妙な料理を、今まで食べたことがなかった。しかも、南米アマゾンの奥地ではなく、日本の大阪で食べられるというから驚きだ。それが何かと言われれば、肉である。そう、きわめて単純な、でも何とも言い難い肉料理なのだ。

大阪の最北に、島本という田舎町がある。京都の南部に密接したその土地は、おおよそ従来の大阪のイメージからはかけ離れた、緑いっぱいのだかな農業の地だ。JR島本駅を起点として、車を道なりに走らせる。それから標識に「亀岡」と出ている方角を曲がると、山道へと入っていく。あまり日が差さず、整備も行き届いていないが、それなりに通行量の多い道なので、それほど心細くはならない。

ずっと林の中を走っていると、地図に乗っていない道を発見することができる。一応舗装された形跡はあるのだが、その道がどこへ通じるのか、どこにも一切書かれていない。その道をまっすぐ進んでいくと、見たことのない樹木がたくさん覆い茂る地帯へと出る。葉をだらりと下げたシダ植物のようなものの割合がかなり多く、その情景は九州あるいは沖縄の山中のようで、到底ここが大阪府であるとは思えない。運の良い人は、ここでアナグマの親子を見ることができるかもしれない。運の悪い人は、ツキノワグマと遭遇してしまう可能性がある。最近の熊は「新世代」と言われ、平気で人と接触し食べ物を得ようとするらしいので、肝の弱い人は行かぬ方がよいであろう。

数十分ただ道なりに進んでいくと、一軒の家屋と駐車場のようスペースが見えてくる。駐車場は「P」と書かれたドラム缶で適当な仕切がされているだけの粗末なもので、普通乗用車一台止めるのがやっとである。

建物は以外と大きく、現代の集合住宅の一階建て二つ分ぐらいは優にある。だが、そのあんまりにも粗末な容貌は、食堂というよりも何十年間放置された倉庫にしか見えない。おそらく何も知らない人であれば、この店を見つけてもそのまま無視してしまうだろう。だが、この店にはちゃんと目印がある。とは言っても、看板が立っているわけではない。入り口の周囲、コンクリ造りの壁に大きく赤ペンキで「肉」と書かれているのだ。これだけでも危険な香りがしなくもないが、ともかくここが世界にまたない料理を喰わせてくれる秘境的名店であるということは、無事この場から戻ってきた食通達の証言で明らかだ。

ちょっとでも力を入れすぎてしまったらそのままベリっと外れてしまうんじゃないかと思える脆そうなトタンの扉を開くと、怪しい店内が目に入る。照明は心細いケーブルからぶら下がる暖色の豆電球一つだけなので、とにかく暗い。しかも床は地面むきだしのいわゆる土間で、そこにゴミ捨て場から拾ってきたとしか思えない、よく言えば年代物、悪く言えばオンボロのソファが配置されていて、その前には成人男性の肩幅ぐらいはありそうな鉄板が、縁日で見かけるものよりも遙かに大きいガスコンロの上にセッティングされていた。おまけに、壁のコンクリートは所々が真っ黒に焦げていて、地面には得体の知れない塊があちこちに転がっている。

部屋の奥には冷蔵庫と思われる四角い箱があったが、これが電化製品のそれではなく、上に氷を入れて冷やす、昭和30年代に使われていた仕様のものであった。ここが料理屋でなく、人肉を食らうことを趣味とする精神異常の殺人鬼の隠れ家だとその場で聞かされたら、おそらく信じただろう。正直、その部屋の異様な空気に気負われ、一度は出ようかと考えた。だが、それができなかったのは、部屋の奥にあった裏口が開き、店主らしき男が現れたからである。

「・・・らっしゃい」

不愛想に挨拶したその男は、思ったよりまともな風貌をしていた。黒髪の短髪で、両耳には金のピアス、眼は若干細目であるが、輪郭は以外とふっくらしていて、穏やかそうな性根を感じさせる。冬であるにも関わらず、白いエプロンの下の上半身は黒いTシャツ一枚で、その起伏と両腕の太さは、長年肉体労働に従事しているしていることが伺えた。

「肉、ですね・・・」

男の言葉に、私はゆっくり頷く。この店にはメニューなどなく、あるのは「肉」のみ、情報通りだ。うっすと店主はくぐもった声で答えた後、冷蔵庫を開いてそこからペットボトルに入った麦茶を手渡してきた。ラベルは剥がされていたが、おそらく自分で作ったものを空容器に注いだのだろう。それからコンロのスイッチを入れた後、白くて大きい脂の塊を丹念に鉄板に塗りつけ、再び裏口から外へと出て行った。

差し出された麦茶を飲んでみたが、思いの外温かった。とは言え、今の季節、キンキンに冷えたものを出されてもそれはそれで困るから、これでよかったのだが。

しかし、何でまたこんなところで店なんかやっているのだろうか。金額は事前に聞かされてはいるが、さほど金持ちではない私にも出せるくらい安い。客なんて月に一人来るか来ないかと言える山の中で暮らすには、到底無理な収入だ。そう考えると、本業は別にあって、この仕事は趣味も兼ねた副業ということになる。まあなんとも、変わった趣味があったものだ。

実を言うと、この店で出される料理について、あまり具体的な情報を貰っていない。ただ「肉」ということだけしか聞いていないのだ。何の畜肉を、どういう方法で食べるのか、それすら全く分からない。不安な反面、未知のものに対するわくわくした気持ちがわき上がってくる。

しばらくして、男が戻ってきた。両手に手袋をして、何かを抱えていた。それが鉄板の上に置かれる。なるほど、これが「肉」か。

それはまごうことなき「肉」そのものであった。成人した男の顔より二回りほど大きい、きちんと正確な正方形の肉の塊が、そこに転がっていた。

男は冷蔵庫から醤油の一升瓶のようなものを取り出し、その中身を思いっきりかけた。わずかな明かりに照らされ、液体が赤紫に光り、鉄板の上で蒸発音を立てて舞い上がっていく。私の服にもその液体がかかったこともお構いなく、男は器用に鉄板の上の肉叢を転がす。それはあたかも麺類の生地を扱うが如く、綿密でありながらある種の豪快さが垣間見えた。ある時は両手をなめらかに動かして肉を回転させ、またある時は手を離し、鉄板の温度に委ねて調理していく。そうしながら十数分の間焼き続けて――。

「できました」

そう言われて鉄板の上の塊を眺めてみた。確かに、表面はよく焼けているようだが、この肉は相当分厚い。中までは到底火が通ってないんじゃないのだろうか。

「大丈夫っすよ、どうぞ」

こちらの考えを読んだかのような言葉を男は口に出した。あまり感情が籠もっているようには思えない声遣い。そして男は黒い皮手袋を差し出した。まさか、フォークもナイフも使わず、これを手に着けてそのまま掴んで食えとでも言うのだろうか。

手袋を両手にはめ、思い切って肉を掴んでみるが、じんわりとした間接的な熱さを感じた。恐る恐る、焼けた肉の表面に口を近づける。血生臭さが鼻に入ってきて、少々せき込んでしまった。思ったよりキツイかもしれない。だが、ここで怖じ気付いては食通の名が廃る。意を決し、正方形の一角にかぶりついた。

暖められた肉汁と、生ぬるい血液が混じった、なんとも生々しい液状の物体が歯から口へと伝わってきた。そして、肉の感触を受け止める。予想通り、外側こそじっくり焼けているが、中はあまり焼けていない、半ば生だった。だが、この感触、この味わいが不思議なことに癖になる。獣のように顎を使って引きちぎった一かけらを、丹念に租借すればするほどに、啞内が脂ぎった液体にどろどろしく染まっていく。何十回も顎を動かし、ようやく欠片を飲み込み、更に攻め

ていく。これを何度も繰り返している内に、顎はかなり疲れてきて、口を開くだけでも重々しさを感じるようになる。

だが、それよりも勝るのは、この正体不明の肉塊を食いちぎり、食らわんとする食欲だ。食べば食う度、ますます旨みを欲し、どんどん噛みしめたくなる。顎のたるさなど、なんのそのだ。正直、今までに一度も味わったことがない感覚で、その時は肉に夢中で考えもしなかったが、その没頭ぶりは少々異常なぐらいであった。この肉で栄養を補充しなければ死ぬ、という強迫観念のようなものが頭を支配し、まるで肉食動物にでもなったかのように、生きるための最重要行為として目の前の個体を食いちぎり、取り込もうと自ずと必死になってしまっていたのだ。

ひょっとすると、調理前の肉に振りかけられたあの紫の液体に、何か秘密があるのだろうか。そう言えば、独特の刺激というか、肉の味とはまた別のスパイスが感じられた。色々な食べ物を味わってきたが、あのような調味料は今まで知らなかった。ただこの味は、あるものに似ている。血だ。人間の身体から流れる、深紅の液体。しょっぱくて飲みづらい、あれだ。あれほど気持ち悪くて、ジョッキに入れて飲み干せと言われても絶対にできないようなあの味が、なぜかこの肉と融合することで絶妙な食欲を刺激している、不思議なことだ。

ああ、顎が疲れる、歯茎が痛い。このまま食事を持続すれば、次かぶりついた時、全部の歯がこの固まりに食い込んでぶちっと抜けてしまうんじゃないだろうか。だが幸いなことに、私の歯茎はそこまでヤワではなく、疲労を蓄積しつつも着実に肉塊を削り続けた。

軽く、一時間は食事を行っただろうか。肉は目に見えて小さくなっていき、とうとう一口サイズにまでなってしまった。もはや口をちゃんと閉じるのにも難儀する程顎門は草臥れていたが、その最後の一欠片は何とも寂しい味がした。

旨い不味いではない、今までの人生になかった、強烈な食事体験。長年憧れであった女とわずか一晩だけ結ばれることができ、その行為が絶頂に達する時に感じるような、空しさを伴った喜び。この食事は、いよいよ終わってしまうのだ。ぐしゃぐしゃに噛み潰した最後の欠片を呑み込んだ時、計らずも目元から涙がこぼれる。

すっと、コップが差し出された。飲んでみると、麦茶。ささやかな苦みが、私を人間に戻していく。

「・・・ごちそうさん、でしたね」

当初の不愛想さからは考えられなかった、店長の優しい声。私は至福いっぱい「ごちそうさま」を返礼とし、その場を後にした。

以上、「肉」についての私の体験記である。興味がある方は、一度足を運んでみるとよいだろう。店主もその自慢の肉で、暖かく出迎えてくれるはずだ。

・・・一体、何の肉なんだって？グルメにそんなことは、関係ないでしょう。

肉

<http://p.booklog.jp/book/101859>

著者：エンジン

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/lazeengine/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/101859>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/101859>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ